

もの言う牧師のエッセー 第72話 ②「稲むらの火」

震災2周年

22000人の犠牲者を出した1896年の明治三陸地震大津波に衝撃を受けた小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）は、かつて紀伊国で地震が起きた際の実話をもとにした物語を英語で執筆した。“A living God”、邦訳「稲むらの火」がそれだ。

1854年、安政南海地震が起こり、大津波が紀州の村を襲った際、庄屋の浜口五兵衛がいち早く津波の襲来に気づき、祭りの準備で浮かれている村人たちに危険を知らせるため、自分の田にある刈り取ったばかりの稲むら（積み重ねられた稲の束）に火をつけて村民を高台に導き多くの者を救ったのだった。その後この物語は長らく戦前の国定国語教科書において読み継がれ、五兵衛の偉業と共に津波の教訓を後世に残し、海外でも 彼の名を知る者も少なくない。

さて、2年前の震災後の夏、岩手県釜石市立鶴住居小2年の佐々木里桜ちゃんもこの物語を読んだ。釜石市を襲った津波は彼女が通っていた学校の3階部分まで飲み込んだという。最初の避難場所も危ないと、皆でもっと高台に逃げ難を逃れたが、家族の無事はそれから何日も後になってようやく分かった。大勢の流された人々の話も聞いた。「いつかみんなの命を守れる人になりたい。」と“五へえさん”に約束した里桜ちゃんの読書感想文は第57回全国コンクールで毎日新聞社賞を受けた。 聖書には

「神は、夜通し炎の光で彼らを導いた。」詩篇 78 篇 14 節

と、かつて古代イスラエルの人々が神によって闇の中を先導されたことが記されている。そしてついに神は人の形をとりキリストとなって地上に降り、稲むらどころではない自分の体を犠牲にしてまで、闇の中で立ち往生する我ら人類のために光となって導こうとされる。“A Living God” でもある 彼に人生の暗がりやを照らしていただき、難を逃れよう。

2013-3-17

